

Blocking Strategies for Hydrological Restoration of Degraded Tropical Peatlands in Central Kalimantan, Indonesia, *Catena* 114: 11–20.

Tonks, Amanda J., Paul Aplin, Darren J. Beriro, Hannah Cooper, Stephanie Evers, Christopher

H. Vane and Sofie Sjögersten. 2017. Impacts of Conversion of Tropical Peat Swamp Forest to Oil Palm Plantation on Peat Organic Chemistry, Physical Properties and Carbon Stocks, *Geoderma* 289: 36–45.

ナミビアにおける時間と約束

渡 邊 麻 友 *

私たちの生活は時間と約束事に支配されている。電車やバスの発車時刻は細かく定められ、学校や職場では締め切り厳守が求められる。そのため1日、さらには1週間の予定を頭に浮かべ、逆算しながら行動する。予定どおりに物事が進まないといライラするし、約束が突然キャンセルされるとなんだかモヤモヤする。

ここでは、このような日本での暮らしから離れ、ナミビアで過ごす「時間」とそこで人びとと交わす「約束」について考えたい。

調査助手 K との契約

2023 年 8 月、私はアフリカ大陸南西部に位置するナミビアでフィールドワークを始めた。そこでの最大の目的は女性のライフヒストリーを聞くことだった。首都から 670 キ

ロほど北上した町を調査地とし、教会のゲストハウスで暮らし始めた。間もなくして指導教員と旧知の現地出身の男性 K が調査助手を引き受けてくれることになった。K は大学卒業後、職を転々としていたようだ。当時、定職には就いておらず海外の研究者とのコネを活かし単発のリサーチアシスタントをして生計を立てていた。調査の打ち合わせを終えた後、彼が用意した契約書にサインすることで私たちの雇用関係は「約束」された。そこにはインフォーマント探しからインタビューの日程調整、同行、地域で話されているオヴァンボ語と英語の通訳などさまざまな業務内容が記されていた。想像を上回る手厚いサポートに驚いた私は、「調査はスムーズに進むに違いない!」と確信した。このときの期待が大きすぎたことを後になって気づく。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 打ち合わせ場所の図書館裏

Kを待つ時間

ゲストハウスから徒歩圏内の小さな図書館の裏が私たちのオフィス代わりだった（写真1）。朝9時に約束すると、たいてい私は8時55分頃に着く。「5分前行動」の感覚が身についているからだろう。しかしそれから30分経ってもKは現れない。何度か電話をかけるが出る気配すら感じられない。10時を過ぎた頃、向こうから歩いて来る姿が見えると、私は思わず「遅いよ！何していたの！？」と問う。すると悪びれる様子もなく「ちょうど来たところだよ！」と言った。私の1時間はなんだったのか。「時は金なり」というように、失われた時間になんとか損をした気持ちになる。

そんなことを考えながら、やっと今日の仕事が始められると思ったのも束の間、Kはてきとうな言い訳をして図書館のパソコンに向かい始めた。再び待たされながら、「約束」の意味そのものへの疑問が頭の中で渦巻く。しばらくしてやっと打ち合わせを始められたが、その頃にはすでに彼のペースに振り回さ

れることに疲れを感じていた。次の日もまた別の日も、彼は約束した時間に来なかった。私の中のイライラとモヤモヤは簡単に消えなかった。あるときから私は待ち合わせ時間より遅れて行くようになった。しかし皮肉にも、そういう日に限ってKはすでに来ているのだった。それでも彼は私が遅れたことについて問いたずことはなかった。

ある日、私は9時に家を出て図書館へ向かった。到着してすぐ、Kの定位置の席を覗くも彼の姿はなかった。想定内だったので、作業を始めた。10時になっても来なかった。しばらくして、さすがに連絡しようと思い図書館を出ると、ちょうど現れた。前日にKは「明日8時ね」と言っていた。彼が時間どおりに来ないことを見越してわざと遅れて到着した私をはるかに上回る遅刻ぶりだった。

Kに連れられ

この日はインタビューを行なう予定だったので、我々は図書館を出て近くの町役場に向かった（写真2）。Kはここで働く知り合いの女性を紹介してくれた。Kが研究内容やインタビューについて説明した後、私はその女性と連絡先を交換した。どうやらこれからインタビューをするわけではなさそうだ。今度は近くの病院へ向かった。ここでもKは知り合いを数人紹介し、私はその都度、彼女たちと連絡先を交換した。その後も同様のことを繰り返し、15時過ぎに図書館に戻って来た。まともに昼食をとることもなく炎天下の中を歩き回ったため、疲れ切っていた。私が

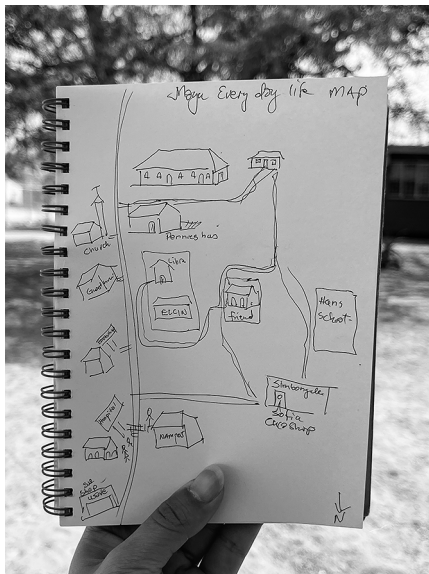


写真2 調査助手Kが描いてくれたMAP

連絡先を交換して改めて日程調整することは、契約内容と違うのではないか。そもそも、週末にKが電話で知り合いにアポとりをして日程を組んでくれることになっていた。そのためこの日からインタビューを始める予定だった。ずっと抱えていた思いが爆発し、「今日全くインタビューしてはいらない？」と彼に問う。すると「いや、週末一緒にいたからできなかったよ」と、予想もしていなかった返答に私は呆れてしまった。日曜の夕方に少し会っただけではないか。この日はKが済ませている約束だったアポとりを行なって1日が終わった。

Kは積極的に知人を紹介してくれたものの、けっきょく日程調整からインタビューまでの多くをひとりで行なった。しかし、こうしてKに紹介してもらわなければ出会えな

かったであろう女性たちからは貴重な話を聞くことができた。そして何よりKとの雑談が現在の研究テーマに辿り着くきっかけになった。

突然の予定変更と偶然の出会い

ようやくインタビューの約束ができて、先方の都合で突然なくなってしまうこともしばしばある。そんなときの過ごし方はいくつかあるが、歩いてスーパーマーケットへ行くのが好きだった。調査が進まないことに焦る気持ちを鎮めるため、舗装されたメインロードのすぐ脇の砂道を歌いながら歩いた（写真3）。そしてときどきすれ違う人と挨拶を交わした。こうして30分ほどかけて辿り着くと店内を一周する。この日はミートパイを購入し店前のベンチで食べていた。すると、この地域では珍しい「シルンプ（白人）」である私に若い男性が話しかけてきた。しばらく世間話をしていると、どうやら男性はこれから親戚のウェディングパーティーに行くそうだった。そして「一緒に行く？」と誘ってくれ



写真3 メインロードと両脇に広がる砂道

た。私は二つ返事でこの誘いに応じた。別の男性と合流した後、軽トラックでゲストハウスまで送ってもらった。そして彼らは30分後に迎えに来ると約束した。

急いで部屋に戻るとワクワクしながら身支度をした。伝統的な衣服であるオヴァンボドレスに着替え、約束の時間に近くのメインロードに出た。しかし彼らのトラックはなかなか現れない。電話をかけても出ない。「騙された!？」と思いながら、もう少し待ってみようと大きな木の影でしばらく立っていた。どのくらいの時間が経っただろう。時の流れはとても遅く感じ、不安な気持ちになる。再び電話をかけると、男性が出た。「どこにいる?もう少しで着くよ」そう言われた私はほっとし、彼らを待った。しかしその後もなかなか現れないため、再び電話をかける。「あと5分くらいで着くから」という返答に、すぐ近くまで来ていると思ったが迎えは来ない。ここでの「あと少し」は自分の体に馴染んだ感覚とは異なり、「5分」は時計で測られる5分間とは異なるようだ。それからしばらくしてようやくトラックは現れた。

始まらないパーティー

どこまでも続くような道をしばらく走り、13時を過ぎた頃、会場に着いた。この地域のウェディングパーティーは非常に大規模で、野外に仮設会場を設置して行なう。親戚や友人知人はもちろん、招かれていない者まで歓迎される。一昔前は3,000人ほど集まることもあったそうだ。連れて来てくれた男性



写真4 パーティー開始前の歓談

は次々と親戚を紹介してくれた。気がつくと私は、この男性のガールフレンド、さらにはフィアンセということで認識されていた。話が勝手に盛り上がることに困惑しながらも、テントの下に並べられたイスに誘導され、人びとの輪に加わった。そこではパーティーの食事を準備する傍で焼かれた牛肉や冷たいジュース、アルコールが振る舞われていた(写真4)。

しばらくおしゃべりを楽しんでいると、ふと疑問が浮かぶ。私は思わず近くにいたおばさんに尋ねた。「パーティーはいつ始まるの?」「分からないわよ!」はっきり言われた。このときすでに15時を過ぎていた。周囲には大勢の人びとがいるが、主役である新郎新婦の姿が見当たらない。またしばらく様子をうかがうも状況は変わらない。日が暮れ

そうになると、痺れを切らした私は近くにいた人たちに「いつ始まるの？」と尋ねる。それでもみな口々に「分からないよ」と答えるだけだった。そしてある男性は「アフリカンタイムだからね」と笑いながら付け足した。

ここで記せなかったことも含めて、ナミビアの人びとと交わした大小さまざまな「約束」はそのとおりに実現することの方が少なかった。限られた時間の中で予定どおりにインタビューが進まないことは、当初、不安や焦りの要因そのものだった。しかし、ナミビアの人びとの「時間」感覚に倣い、今この瞬間に身を委ねて過ごすようになると、思いがけない出会いや幸運な機会に恵まれるようになった。

これらの経験から、私は自分がこれまでいかに時間や約束事に縛られて生活していたか気づかされた。日本では、それらを厳守することが社会的な信頼性や責任感と深く結びついている。もちろん、ナミビアにも時間どおり、約束どおりに行動する人はおり、そのことが重視される場面もある。だが、そこから少し離れて時間の余白や偶然の展開を楽しむ心のゆとりは、私たちを「時間」と「約束」の支配から解放してくれるのではないか。

こうして私自身も時間や約束を守ったり守らなかったりすることを通して、ナミビアの人びとの「アフリカンタイム」を体得していったのである。